

明倫博物館から徳川美術館へ——美術館設立発表と設立準備

香山里絵

はじめに——大正四年の家政改革

- 一 尾張徳川家の展示活動
 - 二 明倫博物館閉鎖の意図
 - 三 美術館建設決定と資金確保
- おわりに

はじめに——大正四年の家政改革

大正三年（一九一四）五月一日、明治三十六年（一九〇三）十二月十九日以来尾張徳川家の家令を務めていた海部昂藏（一八五〇～一九二七）は退任して御相談人となり、代わりに明治四十一年十月三十日から御相談人を務めていた堀鉞之丞（生歿年不詳）が家令となった。堀鉞之丞は江戸時代初期の儒学者・堀杏庵（一五八五～一六四三）の子孫にあたり、加藤高明（一八六〇～一九二六）や八代六郎（一八六〇～一九三〇）と同様、愛知英語学校出身の理学士である。イギリス・ロンドンで尾張徳川家十八代義禮（一八六三～

明倫博物館から徳川美術館へ——美術館設立発表と設立準備

一九〇八）と撮影した写真があることから、義禮の留学に同行したと推測される。⁽²⁾

大正四年九月六日の大阪毎日新聞によれば、堀はこの年に家政改革に乗り出したという。

尾張徳川家内政改革 元相談役等解職

昨年九月中旧尾張藩主徳川家家令に就職せし堀悦之丞氏は侯爵家内政改革の要ありとて相談役加藤高明男、八代六郎氏等に相談の上臨時雇として同家に入らせる元相談役片桐助作氏外七名を解職せしが同家令は之より侯爵家内政に大改革を加ふべしとの事なり

義禮以来、八雲・名古屋の両地で尾張徳川家に仕え、御相談人も務め、明治四十三年から什宝品位監査を行つた片桐助作（一八五一～一九一八）はここで退任し、そのまま御相談人に戻ることもなく亡くなった。

この堀家令の下、大正四年五月二十九日には東京帝国大学（現東京大学）山上御殿での絵巻物展覧会が開催され、同六年には徳川家立明倫中学校と同校附属明倫博物館の愛知県への譲渡、名古屋の所有地整理などが行われ

た。また同九年一月、尾張徳川家十九代義親（二八八六―一九七六）は美術館設立を宣言し、その設立資金獲得のため、尾張徳川家は藏品入札を行い美術館建設準備を始めた。尾張徳川家で開催された展覧会と入札に關しては高橋箒庵（二八六一―一九三七）が多数言及しており、それらを交えてこの年代の美術館設立に向けた動向をみていきたい。

一 尾張徳川家の展示活動

大正四年五月二十九日、東京帝国大学山上御殿にて開催された絵巻物展覧会には尾張徳川家所蔵の絵巻物六点が出品された。源氏物語絵巻三卷・西行物語絵巻一卷・破来頓等絵巻一卷・物語絵巻二卷（掃墨物語絵巻）・歌舞伎草紙絵巻一卷・円山応挙筆・華洛四季遊戯絵巻二卷である。高橋箒庵によれば当日絵巻物を展示したのは「帝国大学構内旧御殿奥の一室にして、横長き全部を披展して、硝子蓋などの離隔もなく、全体直接に拝見することを得た」という。⁽³⁾ 前稿「徳川義親の美術館設立想起」でも紹介した通り、義親は「この展観から後、是非みたいという希望者が多くなった」と述べており、大きな話題となったようである。⁽⁴⁾ この時、箒庵は次のような感想を記している。

侯が其秘庫を開きて歴史文学美術上に最も有益なる絵巻物を同好者に示されたるは、誠に近來の美事にして、斯かる美事は天下の名物を所蔵する大名家を通じて一般に流行せん事、余等の渴望して已まざる所なるが、侯が今回率先して名物展示の雅量を世間に示されたるは誠に好先例にして、余等は斯くの如き美事の今後諸名家に依りて屢繰り返されんことを望み、侯に向つて先づ其先驅の功徳を感謝せざるを得ざ

るなり⁽⁵⁾

箒庵が尾張徳川家の展示を歓迎した様子が見て取れる。

同年十月二十三日には尾張徳川家の本邸である名古屋大曾根邸で園遊会が開催された。これは十月二十三日から二十五日の三日間、名古屋商品陳列場内で開催された高田太郎庵百五十年追遠茶会に併せて開催されたと思われる。⁽⁶⁾ 午後二時から開催された園遊会には松井茂愛知県知事、阪本鈺之助名古屋市長、大庭二郎第三師団長を初め数百名が招待され、同時に二十三日から二十五日にかけて展覧会が開催された。大正四年十月二十四日の『新愛知』によれば初音調度五十二点の他、左記の作品が陳列されていたという。

床掛物	宮本武蔵筆達磨の図
花入	枝竹筒利休作
台子	梨子地葵桐両紋散蒔絵
風炉	減金台子風炉
釜	銀唐草葵紋彫
水指	減金葵紋彫
杓立	同上
蓋置	同上
建水	同上
茶筌置	三島
炭斗	唐物楽籠 ^(案カ)
香合	青貝丸形
中次	堆鳥
茶碗	建盞天目 天目台添

茶杓 銘 萬歳

菓子盆 堆朱花鳥彫

床掛物 小堀遠州侯 初雁盆石の和歌

花入 絵高麗槌

盆石 銘 初雁

床 向掛 古銅籠形⁽⁷⁾

この時、益田鈍翁・高橋箒庵などの観覧には配慮があつたらしく、一般来観者がいなくなつて以降に招かれ、「柵中に入り親しく器物を手につけて拝見」し、「宝の山の鉉脈が聊か其露頭を現したるやうの心地」がしたと箒庵は述べている。⁽⁸⁾箒庵によれば、中奥の間には以下の作品があつたらしい。⁽⁹⁾

掛物 陳所翁牧溪筆 龍虎の図 歌書 重之家集 行成卿筆

手鑑 石清水行幸の記 定家卿 書棚 源氏初音の巻

茶碗 名物 白天目 茶碗 名物 三島筒茶碗

武野紹鷗所持 千道安所持

茶碗 名物 三島筒 銘 藤袴

茶碗 玳皮盞 上手 鸞天目 天目台 名物 尼ヶ崎

茶杓 名物 千利休作 銘 泪

外に初音棚付属時絵皆具五十余点

展示には工夫がこらされていた。義親がかつてある茶人に茶碗を見せたところ、底まで拝見できたと喜び極まって落涙した者がいたので、「茶人は茶碗の底を見るが夫れ程嬉しき者なるか」と思い「理学士たる本能を發揮して」「銅線を以て高さ四五寸許りの枠を作り、茶碗を其上に載せて下に斜掛けに一面の鏡を置き、茶碗の底を鏡中に映して手取らずして、器物

明倫博物館から徳川美術館へ―美術館設立発表と設立準備

の全体を示すの趣向」を工夫したという。「一同の目を驚かした」この装置に対して、義親は笑いながら「是れにて専売特許は得られまじきや」と語ったという。⁽¹⁰⁾

大正六年十一月には十一・十三・十四日の三日間、大曾根邸で能衣裳展覧会が開催された。ここには明治四十四年に金剛謹之助(一八五四～一九二三)が『能楽装束大観』として発行して世に紹介された作品の内、天正・慶長時代から弘化時代までの能装束三十九点・能面二十五点、そして刀剣小道具が展示された。⁽¹¹⁾

このように展覧会が開催される中、尾張徳川家の所蔵品には注目が集まっていた。高橋箒庵は、大正四年十月の茶会の際に接待役として参会した村瀬玄中に尾張徳川家の宝蔵の状況を聞いて書きとどめている。

大阪落城後尾州家に入りたる長持にて殆んど一回も開かざる者あり、日々の取調に、如何なる物が出で来るや之を検分するが楽みにて、宝庫中より日々思はぬ宝物を掘出すやうの心地せりなど語り居れり。因つて其道具点数は何程位なりやと問へば、既に取調べ了りたる者二万点以上に達せりと云ふ。是に至つて余等は啞然として開いた口が塞らず、兎に角名家に名器の多数伝存する日本の如きは、世界に比類なき者なれば、余は唯尾州家のために慶するのみならず実に天下の為に慶せんと欲するなり。願はくば南葵文庫の例に倣ひ、尾州家に於ても適宜の地に美術館を設けて順次其名器を飾り、以て天下公衆を裨益せられんこと希望に堪へず。⁽¹²⁾

村瀬玄中は明治四十三年からの整理に関わっており、この時点で大坂城落城以降開いたことのない長持が尾張徳川家に保管されており、この整理で開かれたという。箒庵は美術館を設けて名器を飾ってほしいと記してお

り、ここに尾張徳川家に対して美術館設立の希望が寄せられていることが確認される。⁽¹³⁾

二 明倫博物館閉鎖の意図

徳川義宣が記す通り、尾張徳川家は徳川美術館設立以前に私立博物館を運営していた。⁽¹⁴⁾ その博物館は、愛知医学学校教授・奈良坂源一郎（一八五四―一九三四）が主催した名古屋市門前町七寺にあった愛知教育博物館を前身とし、明治三十四年（一九〇一）十一月に尾張徳川家大曾根邸の敷地脇で開館した。⁽¹⁵⁾ 本稿でも徳川義宣に倣い便宜上、この博物館を「明倫博物館」と呼称する。⁽¹⁶⁾ 博物館には研究館・陳列館の二棟があり、鉱物標本千三百四十余种・植物標本千六百余种、動物標本二千余种が所蔵されていた他、鳥獣が飼育され、周囲には植物分科園・温室なども併設されていた。

徳川義宣が推測した通り、明倫博物館研究館は旧愛知英語学校で「異人館」と市民に呼ばれていた外国教諭の住宅として使用されていた建物が愛知教育博物館を経て移設され、尾張本草学の祖と言われる伊藤圭介（一八〇三―一九〇二）の筆になる「博物研究館」の額が掛けられていた。⁽¹⁷⁾ 明治十九年に発足した随意会を嚆矢とし、浪越博物会・愛知教育博物館そして明倫博物館へと変化していく中で、この額に秘められた尾張本草学の系譜であるという思いは、この施設の実在意義として終始一貫していたと思われる。⁽¹⁸⁾

明治三十三年（一九〇〇）四月に開校した徳川家立明倫中学校の附属施設として、同三十四年十一月に開館した明倫博物館は、同三十七年七月九日の暴風雨で研究館（旧愛知外国語学校）が大破損し、学校の予算ではとて

も修繕出来なかった。⁽²⁰⁾ このため同三十八年、明倫博物館は急遽尾張徳川家直営とされ、修理が行われた。無事に再開館したのは同四十二年三月であり、四月十六日より再び明倫中学校の附属となった。しかし大正元年九月二十三日、名古屋は暴風雨に見舞われ、博物館も大きな被害に見舞われた。⁽²¹⁾ 明倫中学校校長・森本清蔵は学校の予算剰余金から修繕費を出す承諾を校主徳川義親に求めている。このように再三の被害を受けながら、運営形態を変更してまで持続させてきた様子から判明する通り、明倫博物館は尾張徳川家の中心事業の一つであり、また明倫中学校も同様であった。⁽²²⁾

その明倫博物館と明倫中学校の譲渡が大正六年（一九一七）十一月に発表された。

徳川侯明倫中学を愛知県へ寄附す

―「明倫」の名永久に冠せられん

旧藩主によって経営され、愛知一中と肩を並べて十数年幾多の学生を要請して来た明倫中学校は、愈々来年度から校主たる徳川侯爵家の手を離れて、愛知県の手に移り県立中学校たるべく、八月県参事会に提出された愛知県明年度予算案に学校増設費として四十二万円を計上された事は別項所載の如くであるが、明倫中学は私立としては最も完備した中学校で、明倫堂武揚学校の跡を継いだ歴史ある学校である（後略）（句読点筆者）

（『新愛知』 大正六年十一月十日）

尾張徳川家では同年六月十六日に東京麻布本邸で開催された通常御相談会で、大正六年決算と共に「明倫中学校ヲ県へ譲渡ニ付キ交渉スルコト」が決議されていた。これに基づき松井知事と合意に達したのが、この新聞報道の直前十一月七日であった。譲渡に当たっては校舎の他、経常費として年一万二千元を十年間寄附し、五年以内に別地に移転すること、また

「明倫中学校」の名称は歴史的背景からそのままとして変更しないことが定められた。家令である堀は中学校を寄附する理由として①私立での運営は良教師を得るのに甚だ不便である、②中学校は県当局が為すべき事であり私立で経営する特別な理由がない、③東京に生物学研究所を建設中であり、この種の研究所は国家で未だ設備されていないものであるからこちらに全力を注ぐ方が教育上も学界にも有益である、と述べている。⁽²³⁾

ここには明倫中学校の事ばかりが記され、明倫博物館には触れられていないが、博物館は当時明倫中学校附属であったため、当然のことながら県へ移管する方針がたてられ、器械備品も全て愛知県に寄附することとされた。続く愛知県との取り決めの中で、県は大正十三年三月三十一日までに博物館と中学校の移転地を準備し移転することと定められた。

明倫中学校の譲渡は実際にはこの報道通りにはいかず、愛知県に寄贈されたのは大正八年四月であった。⁽²⁴⁾ また愛知県は移転地及び移転予算が確保出来ず、同十二年になり明倫中学校の校舎敷地の譲渡を希望した。結果、明倫中学校の敷地は譲渡され、移動場所が確保できなかった明倫博物館は閉鎖となり、丹頂鶴を飼育し、⁽²⁵⁾ 舶来野菜や水族植物等を栽培し果樹園・温室まで設営されていた広大な植物園もなくなることとなった。

明倫中学校と明倫博物館を手放した理由として、徳川義宣は①生物学研究所の発足により明倫中学校附属博物館事業の徳川家全事業における位置が相対的に低下したこと、②博物館に於ける研究事業の一部が一層高度な専門的研究事業として、新たな生物学研究所に継承させる体制となったことと推測した。⁽²⁶⁾

義親は大正三年に東京帝国大学理科大学植物学科を卒業したのを機に自らの研究の場として、自邸である麻布富士見町邸内に植物学研究室を設立

していた。これを拡大して生物学研究所にする構想があることは、同五年六月十五日に新聞記事となった。⁽²⁷⁾ 同年十二月には生物学研究所用地として東京の荏原郡平塚村小山に土地が購入され、同研究室は翌六年七月に徳川生物学研究所と改称された。二百十二・五坪の研究建物が新築され、同七年四月に開所、自邸内に置かれていた器具が移管され、徳川所主と桑田義備の二人での運営がスタートした。明倫博物館に代わり、徳川生物学研究所が尾張徳川家事業の主軸となっていたことは確かである。

方針転換はそれのみではなく、この時期、尾張徳川家の運営方針には大きな変更が加えられた。明倫博物館閉鎖、生物学研究所の創設に加えて、尾張徳川家本籍の東京移動、名古屋における美術館設立発表、そして不動産・美術品処分である。

尾張徳川家第十八代義禮は明治二十六年（一八九三）九月以降大曾根邸で暮らしたが、十九代義親は養子に入った当初から東京で暮らし続け、初め夫人米子と水道端邸に住し、大正二年七月十一日に麻布富士見町の新邸に移転した。この時点で義親は東京で暮らすことを決意したらしく、尾張徳川家事務所を東京に移転させ、同九年八月一日、本籍を名古屋・大曾根邸から東京・麻布邸に移動させた。

大正六年以降、尾張徳川家が名古屋に所有していた土地の整理が大々的に行われた。樋ノ口町の貸家処分（大正六年）、鉄道省の大曾根新出来町土地売却（大正八年）、それに伴い不要となった役宅も売却された。同八年九月には新出来町東御邸は取り壊され、二代光友所縁の居間は移築された。⁽²⁸⁾

同年十二月の臨時御相談人会では「名古屋邸建物整理トシテ此際別紙図面ノ不要建物ヲ売却スル事」が決まり、御神間・前侯爵様（義禮）御居間・菊印様（義禮夫人良子）御居間・女中部屋ノ一・同二・女中詰所・役宅・物

置の総建坪四百四十一坪一合五勺五才の処分が決まり、同十年には宝蔵一棟が覚王山日泰寺に、また一部は載恩会に寄附された。⁽²⁹⁾同十一年には四万六千坪もの土地が尾陽土地会社に売却され、翌年には大曾根邸の神殿が長栄寺に寄附された。明倫中学校と明倫博物館の譲渡の際に同十三年三月三十一日までに移転することが求められたのは、同様に土地が処分される予定であったと思われる。これらの整理の結果、名古屋では必要最低限にまとめられた大曾根邸が整備され、次項で述べる通り、大正九年一月には名古屋に美術館を建設することが発表された。またその美術館設立資金獲得を目的として不要な美術品を処分する入札が行われた。

このように見てくると明倫中学校と明倫博物館の閉鎖は、次に続く新事業への変換点であったと思われる。明倫博物館閉鎖時点で生物学研究所の設立と名古屋での美術館建設は既に決定していたものと推定される。義親は日々自分が行う生物学の研究を東京の充実した環境で行い、それに対して名古屋で行う事業として美術館を念頭に置き、土地家屋の整理を敢行した。冒頭で述べた堀家令の家政改革は、義親を冠する尾張徳川家の方針に基づくこのような土地整理も含んだ大々的な改革であり、その実行者が堀家令であったと思われる。

三 美術館建設決定と資金確保

大正九年（一九二〇）一月十二日に義親の発言が広く新聞を賑わした。全国各紙に尾張徳川家の宝物を公開する博物館が名古屋に設立されることが報道されたのである。

尾州家の宝物公開——義親侯の企 博物館を立つ

旧尾州名古屋藩主侯爵徳川義親氏は、少壮理学者として博士にも擬せられ居る程の人なるが、同家に珍藏する名書画、骨董、武器類を徒に死蔵するは本意に非ずとなし近く数十万円を投じて旧藩地名古屋に私立博物館を建設し博く公衆の観覧に供する事となり目下其計画準備中なるが公開の上は同好家の参考となる外美術界歴史界を裨益する事大なるべし。

（『説売新聞』大正九年一月十二日朝刊）

徳川義親侯が博物館を建設

予算五十万円乃至百万円

市内大曾根本邸内に

華胄界の少壮学者として知られたる徳川義親侯が同家に珍藏され居る源氏絵巻五十四巻を初めとして多数の書画骨董武器類を徒らに私蔵するは本意なりとし旧藩地なる名古屋の大曾根邸内に私立博物館を建設して之を一般公衆の観覧に供する事とし目下其準備計画中なるが落成した上は歴史界及び美術界に裨益する所は甚だ少くないであらう右に就き侯爵は語る『予算は五十万円許りかゝるか乃至は百万円と云ふ所です尤も是までも年に一度位は名古屋の本邸の方では書画や刀剣の類や其の他の宝物を陳列して一般の志望者に見せては居たが一寸の間の事として折角に見やうと云ふ人達にも其の意を充たす事が出来ない云ふやうな氣の毒に思つて居たのが一つと大きくそして永久的に見せたいと考へた事とが動機である何時頃何処に建築するか開館までどれ位かゝるかは判らない大体の所は腹の中に充分纏めて居る心算である。陳列せやうと云ふのは全部で一万点もあるだらう。其の中に刀剣類が最も多くして彼は八百口もある。其の中には日本中に二、三口し

か無いてふ工藤正宗もある又有名なのは南泉和尚が禪問答の中に猫を叩き切ったと云ふ南泉正宗があるかと見ると大昔使った鉋のやうな不細工なものもあり研究者に取っては好い資料となる書画もあるが現に絵巻物もまあ誇りとするに足るものもあるさて是等の貯蔵品の保存であるが火災の予防は自信はあるが湿気と光線の具合が骨が折れる博物館などの湿気を防ぐ方法は余り感心しない要は一定の湿度を保つのが大切なことから私の考へでは乾燥した空気を送り室内の空気を遮断し置くのである、また光線が問題ではは直接日に当てないで電氣を利用したいと思ふ。畢竟最進科学を利用して陳列法には私の理想を實際に遣りたい希望である云々『東京電話』

(「名古屋新聞」 大正九年一月十二日)

この報道は前年の同八年十二月十六日、東京・麻布邸で開催された尾張徳川家の臨時御相談人会の内容を受けて発表された。御相談人会には加藤高明・成瀬正雄・横井時儀・八代六郎・佐藤鋼次郎・間島弟彦・海部昂蔵が出席し、他の六件の議案と共に、「美術館ノ建設資金及其維持費ヲ得ル為メ什器ノ一部分ヲ売却スル事」の決議がなされた。つまり美術館の設立資金確保のため、什器売却が決定されたのである。この御相談人会の記録によれば、明治四十三年から続けられていた什器整理により作品は一万二千百四十九点と確認された。この内、同一品で重複する作品、または「什器として存スベキ価値少シト認ムルモノ」を売却し、その収入を以て「保存スベキ美術品ヲ陳列」する美術館を建設したいという内容であった⁽³¹⁾。御相談人会の決議を受けて年明けから、尾張徳川家では入札に向けて慌ただしく準備が進められたことが、高橋箒庵の日記『萬象録』及び堀家令と大曾根邸を司る家令・桜井武愷との往復書簡から判明する⁽³²⁾。当初堀は入

札の時期を大正九年秋と考え、それに向けて御相談人から数名の委員を囑託して名古屋の道具係と相談させ、売却する作品を選択していくことを考えていた⁽³³⁾。しかし義親と箒庵の意見により日程は大幅に早まり、第一回入札は同年四月に開催されることで進められたのである。その経緯をすこし詳しく見てみよう。

箒庵のもとには年明け早々から三井銀行常務取締役・間島弟彦(一八七一―一九二八)及び水戸徳川家当主・徳川圀順侯爵(一八八六―一九六九、昭和四年に公爵に陞爵)から、尾張徳川家の入札の世話をしてほしいと内々に話がきていた⁽³⁴⁾。正式な依頼は一月九日付の堀からの書簡という形で到着した⁽³⁵⁾。

その内容は今度尾張徳川家では書画器具を売却するので一度お目に掛かり御指図をいただきたい。二十日頃名古屋から帰京するのでお目に掛かりたいという内容であった。箒庵はその日午前に郷家人札の相談で来宅した川部利吉に対して、尾張徳川家の入札が上半期であるかもしれないので、四月五月頃両国美術倶楽部を仮押さえるように指示している。

二十一日、堀は箒庵を訪ねた。今度美術館を設立するに当たり、所蔵道具中の一割または一割五分を整理売却することにしたので、その売却世話方一切を依頼したいという内容であった。箒庵は「経済社会の変態を呈せざる間に少しも早く入札を実行せらるべく勧告」した。月末か或は遅くとも来月初旬中に札元を定めて下検分をし、三月下旬または四月上旬に第一回、五月または六月に第二回入札を行ってはどうかと箒庵は提案した。これを受けて堀はその内容をすぐ桜井武愷に伝え、二月十五日までに作品の取り調べを行うよう指示した⁽³⁶⁾。翌日には箒庵は再び川部利吉を呼び、尾張徳川家人札が決まったので両国美術倶楽部の予定を確認し、四月中に一回入札を挙行する準備をするよう依頼している。

大曾根邸の道具係は日程が早まり困惑し、第三部に属する品は道具係でも選定できるが第二部以上の作品は取捨に迷うので至急どなたか派遣して欲しいとの依頼を堀宛てに連絡した⁽³⁷⁾。しかしその委員委嘱を義親は採用しなかった⁽³⁸⁾。義親は自分と箒庵が名古屋に行く際にでも、前家令・海部昂藏を同道すれば良いというのみであり、堀は御相談人の加藤高明・阪本鈺之助・海部昂藏と協議し、すぐに委員を派遣するのは無理なので、とりあえず二部の作品選定にとりかかり、すこし多めに選んでおくよう頼んでいる。

二月四日、大曾根邸からは第三部に属する作品の仕訳が済んだところで途中経過が報告され、売却する作品は第三部から七百点、この内東京に持ち出すのは二百点と伝えられた。これに対して堀は二百点ではあまりに少ない、当家の売立で二十万円か三十万円の売り上げでは世間に対して「ガラクタ」だけを出品したように感じられるのでいかかと思う、もうすこし増やすようにと指示している⁽³⁹⁾。結果第三部からは千二百十三点が選ばれたという⁽⁴⁰⁾。

十三日になって、義親の名古屋入りは二十日、箒庵と美術商は二十六日に下検分することが決まった。この日程と同時に、下検分の際には札元十六人に手伝いを加えた総勢四十人に対して弁当を出すこと、箒庵が名古屋で「名古屋紳士」に応援を頼む宴会を開催するので義親や堀も参加すること、名物といえる作品を加えて入札品の重みを加えること、入札は今回限りとするためにできるだけ多くの作品を出すことが決められた。

この内容を記した堀の手紙を受けて、十五日桜井は慌てて返書をしたためた。二十日に御当主様御帰名は確かに承りました、その日までにはなんとか一通りの選定が終了します、しかしそれは一通りの調査終えたまで

で、侯爵様にご確認いただいた上で美術商に見せるまでには目録を作る必要があり、二部と三部の作品がわからないように札を張り替える作業が必要だと思います、美術商が二十五日に来るのでは徳川家にとって都合良い目録を作ることが不可能です、これまで申しあげた事情をすこしも斟酌することなくこのように進行するとは、什器係一同とても安心できず責任も負えませんという批判的な内容であった。そのため十七日、堀は桜井に再び手紙をしたためた。美術商の出名を二三日延期してはと侯爵に申しあげたが、お聞きいれなく、五日間でできることをすればよい、箱の札はいちいち取らなくても上に紙を貼れば良い、目録も評価の時までに調製する必要はないとのことだ、什器係の皆さんには申し訳ないが、侯爵様は一端決めると変更するとはおっしゃらない方であると、なだめている⁽⁴²⁾。

このように見てくると、この事業を進め且つ判断しているのは義親自身であり、堀は調整役であることが見て取れる。

十八日午前、堀は箒庵を訪ね、美術商の名古屋入りの延期を申し入れた。当初の入札期日は四月二十日前後だったが五月に延期されているので下検分も延期して欲しいと依頼し、ちょうど箒庵宅を訪れていた川部利吉とも相談の上、三月五日に延期を決めた⁽⁴³⁾。すぐに堀は日時延期を電報と書状で桜井に伝えた。二十日になり、御相談人長・加藤高明の意見により更に日時は延期された。加藤は直ちに美術商に評価させるとするのは軽率に過ぎると思見し、箒庵と美術商の評価は無期延期とされた。

三月十五日に堀は箒庵にこの延期の事情を説明している。道具売却は評議員会で決定したが、その後は「侯爵の独裁を以て決行」してきたので評議員中より異説がでて、事を慎重に札元の評価表を評議員会に出し評決を経て初めて入札に着手すべきであるとのことになった、という内容であ

る。それに基づき、まず箒庵単独での下見が必要であるとされ、翌々日十七日に箒庵は下見を行うこととなった。十六日夕刻、名古屋に着いてすぐに、箒庵は名古屋の数寄者として知られる富田重助（一八七二—一九三三）に面会した。富田は既に入札に付する作品を既に一覧しており、以下の通り述べたという。

名品は世襲なりとて出品せず、又世襲外の品は他日美術館設立の際備品として必要なりとて一切出品せざるに依り、点数は約千六百点なれども大抵瓦落多のみなれば、拙者は徳川義親侯に向ひ斯かる御道具の売立にては世話人たる高橋氏が大に迷惑すべしと直言したる程なりと云ふ。⁽⁴⁴⁾

これに対して箒庵は実際に見てから判断すると述べるに留まった。翌日九時に大曾根邸に向かった箒庵は千六百点の品物を通覧し、「約百点は見るべきものなれど万円以上に達するものは数点、売上高五十万円前後」と判断している。尾張徳川家の入札と聞いて札元の希望が多く、この時点で十七名にまで膨らんでいたが、「甚だ当惑の至りなれども今更如何ともする能はず、明かに其事情を各札元に通じて彼等が利益の多少に拘らず此入札会を決行するの外なかるべし。畢竟余が入札品の実体を見届けざるに先^(マ)ち札元を作りたるが大失策にて、後来呉れくも此点に注意せざる可らずと覚れり」と後悔している。

三月二十六日には札元二十名での下検分が行われた。箒庵の想定通り、総売上高は五十万円とされた。⁽⁴⁵⁾ 箒庵はその後も間島弟彦に、札元が二十名に達してしまつたので評議員会であるべく多く出品されるよう運動して欲しいと依頼している。

この年五月に開催予定であつた入札は財界不況のため延期した方が良

いと判断された。⁽⁴⁶⁾ 秋には入札を再設定する動きもあつたが、反対意見が出たのであろう、⁽⁴⁷⁾ 実際に入札が行われたのは翌大正十年（一九二一）十一月であつた。

入札は当初から予定された通り、高額が推定される作品四百四十五点が東京に運ばれて大正十年十一月七日東京美術倶楽部で、東京に運ぶ必要はないと判断された作品千六十四点が翌週十一月十七日に名古屋美術倶楽部で入札された。⁽⁴⁸⁾ 東京に出品された作品の内訳は雪舟・一休・定家・俊成といった名を冠する掛軸六十四点・屏風六点・巻物十二点・茶碗三十三点・茶入三十八点・茶杓二十三点・香合二十四点・香炉八点・花入十五点・文房具十三点・その他鏡台や食器・輿といった内容、名古屋にはオルゴールや長持・戸棚・欄間・鉢・簾など、堀の言うところの「ガラクタ」に当たると思われる品が多数含まれていた。⁽⁴⁹⁾ 札元は東京から山澄商店・中村好古堂・梅澤安蔵・川部商会・多門店・本山幽篁堂・伊丹信太郎・池田慶次郎、京都から林新助・土橋永昌堂・服部来々堂、大阪から戸田彌七・山中吉郎兵衛・池戸宗三郎・春海商店、名古屋から野崎久兵衛・米萬商店・山田百華堂・味岡由兵衛・伊藤喜兵衛・横山守雄・長谷川長宜堂の二十二人、総売上高は五十七万二千元となった。最も値をつけたのは「祥瑞捻茶碗 銘花山」の二万九千八百八十円、続いて「黒地遠山蒔絵冠卓」二万九千円であつた。売上金は「美術館設立準備金」の費目で入金され、他の収支とは全く別に運用されていた。

出品された作品の一部は表記から明治四十四年に今泉雄作の鑑定した作品と同一であると考えられるが、六等以下の等級外が多くを占め、また「偽」とされた作品も散見する。⁽⁵⁰⁾ このように見てみると尾張徳川家の入札は一貫して美術館設立の為の入札であり、いくつかは名品が加えられたも

の、重複品や不要品を処分する内容であった。そして大正九年一月から二月という短期間で道具係が入札に付する作品を選定できたのは、前稿で述べた明治四十三年からの品位鑑査により基本的な階級分けが出来ていたからであると考えられる。⁽⁵¹⁾

おわりに

大正六年(一九一七)、それまで経営していた明倫中学校と明倫博物館の譲渡を決定した義親は、その年から翌年にかけて徳川生物学研究所と美術館を運営するという、後の財団構想の基本となる見解を発表した。明治四十三年以降行われた整理を受けて、不必要な作品は売却され、そこで生み出された資金は「美術館設立準備金」という費目を建てて運用され、設立資金は増加していった。このように堀が大正四年(一九一五)に宣言した家政改革は、義親の方針を明言し実現させていく行動に他ならなかったと思われる。

大正九年の義親の理想とする美術館を箒庵が書きとめているので紹介しよう。

侯爵の美術館建造に関する種々の意見を聴聞せしが、侯は帝国大学に於て文学、理学を兼修せしに依り、多大の興味を以て今度建築する美術館の乾湿を調節するに如何なる材料が適当なるやを考究中なりと云ふ。抑も堅牢なる石材は寒熱の変に依りて動もすれば湿気を招くべし、又外部を堅石にして内部を木造にすれば其木造と堅石との間に湿気を含むの虞れあり、さればとて正倉院の如き木造にては市中に於て火災の惧れあり。日本と西洋とは氣候の大相違あるが故に美術館建設

に西洋の事例を其儘摘要するは危険なり、現に赤坂の東宮御所の如き余りに硬材のみを用ひしが為め却て湿気の度を加へて実用に不適当なりとの評あり、又上野表慶館が石造一方なるが為め湿気を招き易しとの非難あり、此等は最も攷究^(ママ)を要する所ならん。次に美術品を日光に曝すは甚だ好ましからざる事なり、因て開館中は電気を使用する方適當なるべしと考へ居れり、西洋諸国に於ても未だ其例なき者なれども、日光の中には彼の七色の外に紫外線と云へる極めて強度にして物質の変色等を来すべき目に見えざる光線あり、此光線は美術品に変化を来すべき者なるが故に之を避くべく、昼間と雖も電気を使用する事甚だ必要なるべし。又物品の陳列に就ても鏡面を利用して底若くは反對の側等を同時に正面より観覧する趣向を凝らすべき考なり。斯くて完全なる美術館を造り得れば名古屋地方のみならず或は其他より出品を吸収し得て面白き美術館と成るべしなど考へ居れり云々。侯は松平春嶽公の末子にして頭腦明晰、三十台の少壮華族にして右様の考案あるは感服の至りなり。因て其理想的美術館を造らんとすれば今日物価高値の折柄予想外の大金を要すべきに就き、蔵器売却に於て成るべく多額の収入を得らる、事肝要なるべしと勧告せり。⁽⁵²⁾

建物の素材、美術品に対する照明の問題、展示方法と「完全なる美術館」を設立するために具体的に思いをめぐらす義親の姿が見て取れる。⁽⁵³⁾

大正十年の売立を経てすぐにも義親は美術館を開館したかったであろう。しかし残念ながらここで徳川美術館設立の動きは停止したように見える。同年義親夫妻は東南アジアを旅行し、次いで一年をかけてのヨーロッパ旅行に出かけた。⁽⁵⁴⁾ 帰国した翌年、同十二年九月に起きた関東大震災は東京に大きな被害をもたらし、特に開館したばかりの大倉集古館の被災は、

義親の美術館構想に大きな影響を与えたかと思われる。⁽⁵⁵⁾ここまで順調に來ていた美術館設立への動きは、これ以降昭和四年(一九二九)まで殆ど見ることが出来ない。

註

(1) 愛知英語学校は明治七年三月、文部省公布の各大学区に置く七外国語学校の一つとして設置された学校で、五月に成美学校(名古屋七間町)の校舎を譲り受け愛知外国語学校として成立、同年十二月愛知英語学校と改称。通訳を目指す甲、「語学を卒へ専門諸科に入ろうとするものを教える」乙の二種に分かれていた。明治九年には生徒二百四十四人であった(堀川柳人編『名古屋藩学校と愛知英語学校』安藤次郎 昭和十年七月一日)。

(2) 義禮、野呂景義、吉田知行と共に撮影した写真(徳川林政史研究所所蔵写真資料目録)一一五四・一五五は、長沼秀明論考内で紹介されている(長沼秀明「徳川義禮の英国留学―ユニテリアン告白の意味」『金鯢叢書』第四十二輯 平成二十七年三月 徳川黎明会)。

(3) 高橋箒庵『東都茶会記』(慶文堂書店 大正三年)九年初出、熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記』二 淡交社 平成元年三月二十三日

(4) 拙稿「徳川義親の美術館設立想起」(『金鯢叢書』第四十一輯 徳川黎明会 平成二十六年七月)。

(5) 註(3)文献参照。

(6) 高橋箒庵によれば大曾根邸で行われたこの陳列は、施主である加藤秀一が「太郎庵が晩年尾州侯の命に依りて江戸尾州家殿中の襖に人物花卉を描きたる事あり。尾州家と因縁浅からざるを以て、特に懇請する所ありしに、同家(徳川家)にても終に其希望を容れ、有名なる初音の棚及び其付属時絵器具を陳列して、今回市内に群集する一般の好事家に示さる、都合と為りたりと云ふ」とある(高橋箒庵『東都茶会記』註(3)参照)。

(7) 『新愛知』新愛知新聞社 大正四年十月二十四日。

(8) 註(3)文献参照。尚、他に雲樵筆稲束に雉の一軸(西洋式応接間)・文雅筆騰

明倫博物館から徳川美術館へ―美術館設立発表と設立準備

王閣の大幅(大書院)・岩佐勝以筆風俗画・土佐光起筆松島厳島の屏風(以上二点、寿の間)・宮本武蔵筆達磨掛幅(茶亭)を見た記録されている。

(9) 高橋箒庵「尾藩宝蔵」(熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記』二 淡交社 平成元年三月二十三日)。

(10) 註(3)文献参照。

(11) 『新愛知』新愛知新聞社 大正六年十一月十二日・十四日。

谷口香嶠・金剛直喜編『能楽装束大観』第二卷 山田芸艸堂 一九一一年五月。

(12) 註(3)文献参照。文章内にある南葵文庫は、紀伊徳川家が明治三十五年(一九〇二)麻布の自邸内に開設した図書館である。

(13) 箒庵は大正八年六月四日から六日にかけて『大正名器鑑』編纂の為、尾張徳川家の五十六点の名物と「准名物」の茶碗を観覧する。また大正九年十二月十九日には麻布富士見町邸で、益田男爵蔵と尾張徳川家蔵の源氏物語絵巻を比較する展覧会に参加している(高橋箒庵『萬象録 高橋箒庵日記』巻八 思文閣出版 平成三年十二月十日)。

(14) 徳川義宣「明倫博物館―尾張徳川家の経営した博物館―」(『金鯢叢書』第十四輯 徳川黎明会 昭和六十二年八月三十日)。

(15) 愛知教育博物館に関して左記の論考が発表されている。

西川輝昭「愛知教育博物館関係史料の紹介と解説その1」(『名古屋大学博物館報告』No.21 名古屋大学博物館 二〇〇五年十二月二十五日)。

蟹江和子・西川輝昭「愛知教育博物館関係史料の紹介と解説(その2―当時の新聞記事に見るその足跡―)」(『名古屋大学博物館報告』No.23 名古屋大学博物館 二〇〇六年十二月二十五日)。

島岡眞「奈良坂源一郎関係史料目録」(一)～(四)(『名古屋大学博物館報告』No.29-27 名古屋大学博物館 二〇〇六―一一年十二月二十五日)。

加藤詔士「愛知教育博物館の開設」(『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』五十四巻二号 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 二〇〇七年三月)。

(16) 徳川義宣が指摘する通り、「明倫博物館」は経営体制の変遷や時期に限らず、「徳川邸内博物館」「明倫中学附属博物館」「博物館」「徳川博物館」といった

様々な名称で呼ばれている(註(14)文献参照)。

尚、明倫博物館に関しては左記の論考が出ている。

岡田茂弘「東福寺銘瓦等と明倫博物館」『学習院大学史料館紀要』第十二号 学習院大学 二〇〇三年三月。

橋本佐保「学習院と「明倫中学校付属博物館」…旧制学習院歴史地理標本室移管資料を中心に」『学習院大学史料館紀要』第十九号 学習院大学 二〇一三年三月。

(17) 徳川義宣は明倫博物館研究館について「官立愛知外国語学校のいづれかの建物であったかと想像される」と記しているが(註(14)文献)、『名古屋藩学校と愛知英語学校』(註(1)文献)の記載から、愛知英語学校(愛知外国語学校)の外国教諭宿舎が愛知教育博物館となり、明倫博物館の研究館として使用されていたことが確認される。

(18) 註(1)文献参照。伊藤圭介の歿年を考えると、この額が明倫博物館開館後に書かれた可能性はなく、愛知教育博物館時代から使用されていたと思われる。

(19) 明倫博物館には田中芳男男爵が寄贈した額縁入りの植物標本百七十五枚があり、「遠山大膳の墓に詣でて其蒐むる処の腊葉を購め、教育博物館に託した」ものが含まれていたという(『新愛知』大正五年六月二十六日)。保存資料の点でも尾張本草学の系譜を表明していたと思われる。

尚、明治三十四年に発足した名古屋博物学会は、明倫博物館の研究を支える重要な役割を果たしていたと考えられる。明倫博物館の佐藤保祐は名古屋博物学会の設立時の会員であり、明治三十七年までに毎月開催された例会には出席している。明治三十四年から大正二年までに例会は明倫博物館で十六回開催され、佐藤は十二回の講演を担当している。また、第十九回例会(明治三十六年一月二十五日)では、札幌農学校第十一期生である沼田正直が尾張徳川家が八雲町で実現した鮭の孵卵に関する報告を為している他、明治四十五年七月七日に県立高等学校で開催された第八十一回例会には義親と桑田義備が出席し、桑田は「たうもろこしニツキテ」、義親は「生物と開国」の講演を行った(『学会三十年史』名古屋博物学会 昭和五年十二月三十日)。

(20) 徳川義宣は明治三十七年七月十七日付の百六十六円余の修繕費明細を紹介し

ているが、明治四十二年まで開館出来なかったことを考えるとそれ以上の修繕費がかかったことが想像される(註(14)文献)。

(21) 『新愛知』は大正元年九月二十四日・二十五日と欠刊し、大正元年九月二十六日号には次の通りある。

二十三日の大暴風雨は濃尾地方を中心として殆ど全国各地に亘りしも関西地方は通信機関杜絶の為実情を知るに由なかりしが本日午前九時半頃に到り大阪方面の電話線は漸く一回線の開通を見たり。

他に名古屋港の船舶被害は六十九隻・堤防破損が二十一か所・死者百人・行方不明三十六人とある。

(22) 徳川義宣が指摘する通り、尾張徳川家特別会計には「中学校資金積立金」が設けられ、その運用益により明倫中学校には校主負担金として一万から一万三千円の金額が毎年支出されていた。年末慰労金や退職手当金は別に尾張徳川家から支払われており、尾張徳川家の一大事業であったと思われる(註(14)文献)。「自明治三十一年至明治四十五年明倫中学校関係書類」。

(23) ここで述べる①の背景には、大正五年六月十一日の明倫中学校森本清蔵校長辞職があると思われる。森本校長は兵庫出身で明治三十一年(一八九八)十二月より同三十三年六月まで福岡第一師範学校、同三十九年五月から大正二年まで奉天両級師範学堂で校長を務めた人物であるが、宮崎県立宮崎中学校校長となるために辞職した(『明倫中学校月報』大正五年六月三十日)。森本と義親の不和は大正三年頃から新聞を賑わしているが、尾張徳川家の御相談人をも務めていた阪本鈔之助名古屋市長によれば、意見は「甚だしき程度」があるが衝突はおこしておらず、退職は私立学校が官立公立学校に比べて物足りなかったことにあり、森本校長は前途に一大飛躍を求め、宮崎県知事がその力量を評価して優遇して迎える準備をしたと述べられている。また森本清蔵本人の談話としても同様のことが記され、就任当初は三年から五年の期間で実を挙げたいと思っていたが八年かけて何らの功績も残せなかった。名古屋を去るのは忍びがたいが、教育上国家に貢献する為に移動すると述べている(『読売新聞』大正五年六月十二日)。森本の退職後、明倫中学校校長は長く空席となった。

(24) 文部省告示第二十三号(官報第四千九百六十四号 大正八年二月二十一日)。

(25) 『学会三十年史』名古屋博物学会 昭和五年十二月三十日。

(26) 註(14) 文献参照。

(27) 「義親侯の生物学研究所設立―遠からず計画実現の決心」(『読売新聞』大正五年六月十五日)。

(28) 大正八年六月の御相談人会で「名古屋東邸家屋ハ本邸内へ移転スルコト」が決議されている。

(29) 載恩会は尾張徳川家初代当主・徳川義直を祀る源敬公廟建設の為に造られた財団法人である。

藩祖廟建設決定

旧尾州藩源敬公廟舎建設問題に関し過日当市磯部館庶務課長は該廟舎建設の目的の財団法人載恩会の設立認可を得べく上京し内務省に交渉したる結果去る十三日付を以て同会設立の認可ありたるに付き之れにて愈々廟舎建設の基礎を固めたれば近日中に載恩会の総会を開き役員を選挙を為して其上大池町の土地譲与を受け建設工事に着手すべしと

(『新愛知』大正元年十月十九日)

(30) 他にも徳川美術館建設発表について以下のような記事がある。

徳川義親侯が博物館を建設

源氏絵巻物其他

多数の名画骨董を死蔵するを惜み

歴史上美術上の好資料

華胄界の少壮学者として知られた徳川義親侯は今回同家に珍藏されてある源氏絵巻物五十四巻を始め多数の名画骨董武器類を徒らに死蔵するを本意無しとし旧藩地たる名古屋大曾根の邸内に私立博物館を建築し周く公衆の観覧に供すべく目下計画準備中であるが落成の上は歴史上美術上に裨益する処が少く無いだらう侯爵は語る『予算は五十万円乃至百万円ですが未だ建築費維持費其他詳細に亘って決定しては居りませぬ起工には出来るだけ早く懸り度いと考へて居ります』云々(東京)

算へ切れぬ能面や能衣裳

右に就き大曾根の徳川邸の家扶桜井武愷氏は曰く『予て此の噂は聞き及ん

明倫博物館から徳川美術館へ―美術館設立発表と設立準備

で居るしその宝物も確に有りますが未だ設計の事も当邸を充てることも何等通知がありませんので直に御答へすることは出来ませぬけれ共勿論右様の次第を発表に成つて居るとすれば近いうちに何とか知らせがあるでせう』云々因に同邸には日本の三舞楽と称せられて居た程、奈良の春日、浪速、住吉に対抗して名古屋附近の神社は舞楽が盛であつた關係上能面や能衣裳、楽器、刀剣類等算へ切れぬ位尊い古器物が驚く程沢山に蔵せられて居て何れも考古学者や好事家が垂涎せしめて居る

(『新愛知』大正九年一月十二日朝刊)

(31) 大正八年十二月十六日臨時御相談会協議事項(御相談会決議録)

一 御當家什器ノ整理ハ明治四十三年度ヨリ着手シ約金參万貳千五百七拾參円ヲ消費シ漸ク一段落ヲ告ケ候ニ付右ノ内同一品ニテ重複セルモノ若クハ什器トシテ保存スベキ價値少シト認ムルモノハ此際賣却ニ附シ其收入ヲ以テ美術館ヲ建設シ之レニ保存スベキ美術品ヲ陳列シテ斯界専門家ノ參考資料ニ供スル件

什器總点数 一二、一四九

内、世襲

六三〇

新第一部

三四四

二部

六、〇三五

三部

四、九四三

等外

一九七

(32) 「大正九年 御什器売却ニ関スル書類綴 什器係」徳川美術館蔵

尚、この入札に関しては既に左記に紹介されている。

四辻秀紀「尾張徳川家の名宝―里帰りの名品・優品をめぐる」(『尾張徳川家の名宝―里帰りの名品を含めて』徳川美術館 平成二十二年十月二日)。

(33) 「堀鉞之丞書簡 桜井武愷宛 大正九年一月二十一日」桜井武愷書簡 堀鉞之丞宛 大正九年一月二十二日「堀鉞之丞書簡 桜井武愷宛 大正九年二月三日」徳川美術館蔵。

(34) 間島弟彦は明治四十五年一月二十八日から尾張徳川家の御相談人を務めている。箒庵は三井銀行出身のため、親しい間柄であつたと思われる。また箒庵は水戸藩士高橋常彦の四男であり、その縁から水戸徳川家当主・徳川圀順と交流していた。

(35) 以下『萬象録 高橋箒庵日記』巻八「思文閣出版 平成三年十二月十日」の記述を中心に、徳川美術館に所蔵される書簡で内容を補う。

(36) 「堀銭之丞書簡 桜井武愷宛 大正九年一月二十一日」徳川美術館蔵。

堀から桜井宛書簡には、先日名古屋に伺った時に自分はこの秋頃実行のつもりであったが、侯爵様も高橋氏も前半期が良いとの意見である。就いては代拝や送迎は加納氏に頼み桜井氏は全力を什器に向け、またこれまで什器係のみではなく臨時雇を入れてでもお願いしたい。人手不足であれば臨時雇を何人でも雇い必ず実行するようにという内容であった。しかし箒庵の『萬象録』には、堀が「今の道具係は多くは老体にて拂々しく進行せざれば、貴説に従ひ招人を取替へて急速売却道具選分方を行進すべし」と述べたと記されており、名古屋の道具係は年配者で占められていたと想像される。冒頭で述べた六十四歳になる片桐助作を辞めさせた経緯もこのような背景によると想像される。

(37) 尾張徳川家では明治十三年から「天」「地」「人」の三部に分類されて作品が扱われてきた。明治四十三年から大正四年の整理で格付けは「第一部」「第二部」「第三部」に変更されている。この内、「第一部」は明治二十六年に世襲財産附属物に認定された作品であり、全点売立対象外とされている。

(38) 「堀銭之丞書簡 桜井武愷宛 大正九年二月三日」徳川美術館蔵

(39) 「堀銭之丞書簡 桜井武愷宛 大正九年二月六日」徳川美術館蔵

(40) 「堀銭之丞書簡 桜井武愷宛 大正九年二月十二日」徳川美術館蔵

(41) 「桜井武愷書簡 堀銭之丞宛 大正九年二月十五日」徳川美術館蔵

(42) 「堀銭之丞書簡 桜井武愷宛 大正九年二月十七日」徳川美術館蔵

(43) この時堀は田安家の作品売却の話をしている。田安家当主・徳川達孝は侍従長に在職中で、世間体があり入札が実行できないので、尾張徳川家の入札に田安家の作品を加えたいと申し入れている。箒庵と川部には異論はなく、田安家の作品を尾張徳川家麻布邸に持ち込み、麻布邸で下検分が行われた。

(44) 註(35)参照。尚、文中の「世襲」は明治二十六年四月十九日宮内省認可の「世襲財産附属物」六百三十点と考える。

(45) 三月二十六日には「二十点許」追加出品が準備されていた。主な作品として「一、周文筆(松溪印)寒山拾得図、一、公任卿葦手書歌切、一、春日曼荼羅、一、

祥瑞大捻茶碗、一、青磁樽形花入、一、時代蒔絵重硯箱」の六点が挙げられているが、「祥瑞大捻茶碗」と思われる作品以外は入札目録には見られないことから、この後の過程で再び入札から外されたことが想像される。

(46) 註(35)参照。

(47) 大正五年九月十七日には箒庵の下を京都の林新助が来訪し、関西財界も不況のまま小康を保っており、あまり打撃を被っていない人の中には道具界に名器があまり出ないのを物足りなく思っている人がいる、尾張徳川家が入札を行えば決して不結果にはならないと述べている(註(35)参照)。

(48) 『尾州徳川家御蔵品入札』東京美術倶楽部、『尾州徳川家御蔵品第二回売立』名古屋美術倶楽部。尚、名古屋で開催された第二回売立は名古屋美術倶楽部と同時に光円寺(名古屋市中区大津町桜町)を第二会場として使用している。

(49) 他に表装されていない作品や、「刀」と記された作品が五本ずつにまとめられて合計百三十本、墨・朱などが含まれている。

(50) 註(4)文献参照。「丸形紫檀六角台付」、「青石半月彫足付」の硯石などは「等外」と記されている。また「宋名賢六条」「清人吳筆淡彩画山水」などは「偽」の判定が下されている。

(51) 註(4)文献参照。

(52) 註(35)参照。

(53) 義親または周囲の人物が取り寄せたと思われる英文の博物館雑誌やパンフレットが現在まで残されている。

(54) 大正十年五月二日から八月二日東南アジア、同年十一月二十九日から翌年十一月十七日ヨーロッパ。東南アジア旅行の紀行文として『じゃがたら紀行』(郷土研究社 昭和六年十二月)が、ヨーロッパ旅行の前半の紀行文として「西に旅して」(『報知新聞』大正十一年二月七日・六月二十九日)がある。

(55) 大正七年五月四日より公開された大倉集古館は関東大震災で建物と陳列中の所蔵品を失った。当初の陳列館は西洋風建築の第一号館、和風建築の第二号館、和洋折衷式建築の第三号館からなり、所蔵品は美術品三千六百九十二点、書籍一万五千六百冊であったという。当初から「完全なる防火設備」を有していたが、「水道幹線の断水に依て如何とも為すことを得ず、遂に各館共火災の厄に遭ひ、

如上幾多の貴重品を烏有に帰した」という（『大倉集古館列品要略』大倉集古館
大正九年、『大倉集古館要覧』大倉集古館 昭和四年）。

〔謝辞〕 本稿執筆及び資料閲覧にあたり、尾張徳川家第二十二代当主徳川義崇氏を
はじめ徳川美術館学芸部長四辻秀紀氏、学芸部長代理原史彦氏、学芸課長吉川美

穂氏ほか徳川美術館学芸部の諸氏に格別のご高配・ご教示を賜りました。また本
論の執筆過程において徳川家古写真整理に御協力いただいている徳川林政史研究
所非常勤研究員長沼秀明氏、井芹啓子氏から示唆を受けたことは多く、ここに記
して感謝致します。

（総務部 非常勤学藝員）

金 鯨 叢 書 第四十二輯 [年一回刊行]
— 史学美術史論文集 —

平成二十七年 三月 三十日 編集
平成二十七年 三月 三十日 印刷・発行

編集者 竹 内 義 誠
徳 川 崇

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話 (3950) 〇一一二番 (代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話 (3950) 〇一一七番 (代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話 (935) 六二六二番 (代)

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話 (751) 一七八一番 (代)

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二
株式会社 図書同朋舎
印刷所 電話 (361) 九一二二番 (代)